

市指定史跡  
かん のん どう  
**観 音 堂**



観音堂は、1737年に福建出身の唐船主によって建立されたと考えられています。その後、再建やいくどかの改修を経て、現在の建物は、1917年に改築されたものです。入口のアーチ型の石門は唐人屋敷時代のものといわれています。

本堂には、向かって右側に慈悲深い仏として中国で古来から慕われている観世音菩薩が、向かって左側に商売繁盛の神である関帝がまつられています。



#### 関帝について

関帝は、三国志で有名な武将、関羽雲長が神格化されたものです。三国志において、義侠心と忠節心に富んだ人物とたたえられた関羽は、文武兼備の武将として古くから尊敬を集めており、特に清王朝においては守護神として手厚くまつられていました。

武神として信仰されるのはもちろんのこと、信義に厚く理財に精通しており、ソロバンを開発したとも言われることから、財神としても信仰を集めています。

## 唐人屋敷の歴史

1639年、外国貿易は中国とオランダの2国のみとなり、貿易のために来航したオランダ人は出島に住まわされましたが、唐人(中国人)たちは、長崎市中に散住することが許されていました。

しかし、密貿易やキリスト教伝播の恐れがあったため、1689年、江戸幕府は、現在の十善寺地区に唐人屋敷を建設し、唐人たちを住まわせました。唐船で長崎に着いた唐人たちは、役人の厳しいチェックを受けたのち、わずかな手回り品のみを持って、唐人屋敷へ入りました。

唐人屋敷は、高い堀で囲まれ、さらにその外側は堀や竹垣で囲まれていました。出入り口には番所があり、人の出入りが厳重に制限されていました。唐人は、ひとりで外出することは許されず、外出が認められるのは、唐寺へ団体で参拝するときなどに限られていました。唐人屋敷の敷地内には、木造の長屋が数十棟建ち並び、多いときには約2千人の唐人が生活していたと言われています。

1859年、日本が開国すると、唐人屋敷を出て大浦の外国人居留地や新地に進出した唐人も多く、唐人屋敷は荒れ果てていきました。その後、1868年に正式に解体され、唐人屋敷は179年間の歴史を閉じたのでした。

#### 長崎市まちづくり部まちづくり推進室

長崎市桜町2番22号

電話 095(829)1272

FAX 095(829)1175

Email:machidukuri@city.nagasaki.lg.jp

## 唐人屋敷跡の4つのお堂について



ど じん どう  
市指定史跡 土 神 堂



土神堂は、1691年に唐人屋敷に滞在していた船主たちの願いにより、唐人屋敷に建てられたお堂の中で、一番最初に建てられました。1784年におこった大火で焼失し、唐3か寺(※)により復旧されました。その後も火災や老朽のための改修を経て、現在の建物は、1977年に復元されました。

土神堂にまつられている土神さまは、福德正神ともいわれ、土地や家を守り、豊作、金儲け、治病の神様として、中国古来から民間で広く信仰されてきた神様です。

土神堂前の広場では、土神さまの誕生日(2月2日)にお祭りが開かれ、舞台を仮設し、唐人踊りや劇などが催されていました。

※唐3か寺・・・興福寺・福濟寺・崇福寺

**長崎の生活の中にみる土神さま**  
長崎のお墓には、墓石の横に土神と書かれた小さな石碑が建っているものを多く見かけます。  
これは、中国の土神信仰の慣わしが、長崎の風習として根づいたものなのです。

てん こう どう  
市指定史跡 天 后 堂



まそ

天后堂は、海の女神 媽祖さま(天后聖母とも呼ばれる)をまつるため、1736年に、当時唐人屋敷に入居していた南京地方の唐船主たちによって建立されたお堂です。

当時、唐人たちは、唐船で、季節風にのり、海を渡ってやってきました。その航海の安全を祈るため、媽祖像を船内にまつり、日本に着くと、唐人屋敷内の天后堂へお運びしました。このようすは、現在のランタンフェスティバルで、「媽祖行列」として再現されています。

このお堂には、中央に、媽祖さまがまつられているほか、向かって右側に関帝が、向かって左側に観世音菩薩がまつられています。

**媽祖伝説**  
媽祖さまは、960年、中国福建省の小さな島で生まれました。幼少の頃から大変聡明だったといわれています。  
媽祖さまが19歳の頃、家ではたを織りながら、疲れてうとうとしていると、父と兄の乗った船が難破する夢をみました。媽祖さまは、とっさに海中へ身を躍らせて、兄を口にくわえ、父をつかんで懸命に泳ぎました。そのとき、母に起こされ、返事をしたため、兄を離してしまいました。ちょうどそのとき、海難事故により、父は助かったが、兄は溺れて亡くなったという知らせが届いたのでした。  
また、媽祖さまが23歳の頃、桃花山という山で、金精と水精という妖怪が付近の作物を荒らし、村人たちを困らせていました。金精は千里眼、水精は順風耳という別名をもち、千里眼は千里先を見ることができ、順風耳は千里先のかすかな物音も聞きつける能力がありました。両精をみつけた媽祖さまがハンカチを一振りすると、両精は目が眩み、手がしびれて、ひれ伏したのでした。媽祖さまは、両精を許して、海上を守る仕事を手伝わせることとしたのでした。  
そして、媽祖さまが28歳のとき、人々を救いたいと、家人に別れを告げ、神となって、五色の雲に乗って昇天したといわれています。

ふっけんかいかんてんこうどう  
市指定有形文化財 福建会館天后堂



福建会館は、唐人屋敷が解体されたのち、1868年に福建省南部出身の貿易商たちの会所として建設されました。唐人屋敷のあった時代、この場所には聖人堂というお堂が建っており、その基盤の上に福建会館を改築したという記録が残っています。1888年の火災で焼失し、1897年に現在の会館が再建されましたが、会館本館の建物は原子爆弾により倒壊し、正門と天后堂が現存しています。

このお堂には、2体の媽祖さまがまつられており、ランタンフェスティバルの「媽祖行列」では、小さい方の媽祖さまを、寺町の興福寺までお運びします。

